◆◆◆

本書は「寵愛Ⅰ」「寵愛Ⅱ」の再録本です。

本書は成人向けです。十八歳未満の方の目に触れないよう、お願いいたします。

無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載は禁止です。

◆◆◆

もくじ

1話 宝石遊戯 4
2話 勇者母胎 17
3話 椅子と結婚した王様 66
4話 愛辱ウェディング 84
5話 苗床寵姫 105
6話 箱の苗床 118
7話 牝嫁騎士 129
8話 淫堕隷属竜寵姫 140
掲載一覧 159

宝石遊戯

黒と赤を基調とした荘厳な玉座に魔王が腰をおろしている。
成人男性の3倍は大きな巨体に、獣の頭蓋骨を被っている。唯一素肌が見える口元も人にしては有り得ないぐらい口が裂け、歯はナイフのように鋭い。
「中々の眺めだな」
巨大な魔王が見下ろす眼下には、少年が魔王の腰に跨っていた。どこにでもいそうな平凡な見た目だが、満点の夜と星空を詰め込んだかのような、美しい眼をもっていた。半壊した鎧から覗く素肌には紅色の点が幾つもつけられ、所々白濁で汚れている。
「我に大敗し躾られた気分はどうだ、勇者よ」
「はぁ！　んっ、あぁ」
魔王に激しく突かれる度に女のような声をあげて、潤んだ瞳で魔王を見上げる。そんな少年の表情に満足そうに魔王が腰を動かす。
「ひっ、あ、やめぇ――!!」

下から突き上げられる衝撃に耐え切れず、ポロリ、勇者は涙を流した。流れた涙は透明な液体ではなく、小さく無数の真珠が頬をコロコロと伝う。
「見目麗しい眼よ」
鉤爪のような骨しかない指が勇者の目のふちをなぞる。
「抉りとって、飾りたくなる」
「っ！」
強張る勇者の黒髪に口づけ、耳元で「戯言よ」と囁く。低い音と吐息に鼓膜が震えて、背筋にゾクゾクと言い難い衝動が勇者に走った。脳みそがグズグズに蕩けて、上手く思考が纏まらない。
「しかし御前を眷族にはしたいものだな」
「そ、そんな、誘いにのるわけないだろ、体を好き勝手されても心まで……魂まではわたすものか」
「そうか」
震えながらも確固たる意思を持つ勇者の言葉に魔王は頷く。
「輝く人間を地の底に叩き落とすのが我の役割よ」

グジュ！　ドジュ！　ドヂュ!!　ヌヂュ!!
雄々しいソレを小柄な体躯に打ち付けられ、逃げようと腰を捻ろうと、骨の手に鷲掴みされた腰は一センチもずれない。ダイレクトに届く快楽に脳髄が焼け落ちそうだった。
「あ、ひっ、やっんぁあ！　やめ、やめろぉお！　あぁああ！　くぅ……！」
「宿敵にこうも弄ばれ、浅ましくも快楽を貪るか」
「いうな、いうなぁ」
耳元で囁かれる声に勇者の体が羞恥で染まる。しかし尻肉は相分からず男根を咥えて放さない。流れる涙が桃色の宝石だらけになる。
「こうも熱烈に締め付けられては、流石に我慢がきかんな」
勇者の直腸内で亀頭がさらに膨れ上がり熱くなる。先端ギリギリまで抜き、一拍おいてズブリと根元深くまで直腸内に肉詰めする。
「〜〜〜〜！」
真珠をこれでもかと流零しながら勇者は絶頂し、魔王も果てた。
どぴゅるうううううううどぷんん!!　どぴゅぷぷんんんん!!
灼熱の濁流が腸内を逆流し、頭が真っ白に染め上がる。

「んひぃいいいいいいいいいいいいいぃ!!」
言葉にならない絶叫の変わりだと、ピンクトルマリンをぽろぽろ零し、玉座を宝石で埋め尽くす。輝く石は勇者自身の白濁液がふりかかり、光が鈍る。
骨の指が桃色の石を拾い上げ勇者に見せつける。
「見ろ、体はとっくに屈服しているではないか」
「はぁ、それでも、それでも、心まではぁ?!」
人外精液で満杯の直腸を再び抉られるように、魔王が再び腰を動かす。不意打ちの行動に勇者が白目剥いて絶叫する。
「やめぇいっへる、いっへるろぉ?!」
「御前が心の底から屈服するまで、いつまでも続けるぞ」
ぶべ、ぶぼぉと結合部分から精液と体液が溢れ噴き出す。瞳から流れる宝石は色とりどりのものだが、桃色の比率がやや多い。
「体と同じく、心も素直になるがいい」
魔王が呪文を唱えれば、王座と床に散らばっていた宝石が集まりだした。玉座の横へ勝手に集まり飴細工のよう溶けて混じりあい、粘土のよう捏ねまくり回しながら出来上がっ

たのは、魔王の玉座を似せた椅子。
座には丁度、排泄孔を穿つ箇所に桃色のディドルが癒着していた。ダイヤモンドのよう見るからに硬く疣や捩じりがふんだんに施された卑猥な形ながらも、宝石の塊は場違いなほど輝いている。
「さぁ、座るがいい御前専用に造った椅子だ」
「ひっ、やめ！　いやだぁあああ！」
拒絶を叫ぶも、魔王は気にせず勇者を抱え宝石で出来た椅子へ降ろしていく。
「お、あっ、あ」
ズブ、ズブッブ、ミチミチ……。直腸一杯に埋まっていく宝石梁型。全てを尻穴で呑みこむと、触れられてもいない花芯が果てた。
「――――っほ♥」
蕩けた夜空の双眸からピンクパールが幾つか零れる。
「御前の涙で造ったから相性がいいのだろうな。これで動けばどうなるものか」
宝石梁型は触れてもいないのに、苛烈に上下運動をしだす。不揃いな凹凸は不規則に過敏な肉壁を抉り、擦り、容赦なく性感帯を狙う。

ゴリィ、グヂュ！　ヌブ、グチュ！　グプッ！　〝ヌヂュ！

「う、動いてるぅ?!　ひっ、勝手にぃ、嫌ぁあああ！　っつほぉおお♥　お、ぉおお！　っおほおぉおおお！　も、もうらめぇ、いぐぅ、いっでりゅぅ！　いっでりゅからぁああ!!」

逃げようと腰を浮かせたが、ひじ掛けが水飴のよう溶けて手首を椅子の中へ引き摺りこみ拘束された。

「そ、そんひゃぁあああひ！　ひぃいい！　あ、ぁああ♥　あぁあああイク、イクぅううう！」

容赦ない梁型責めに勇者は情けない悲鳴をあげ、花芯からは薄い精液が迸しった。溢れる涙は濃厚な桃色トルマリンとなり床へぽろぽろ落ちていく。

グヂュゥヌヂュゥ！　ぐぶぶっ！　ぶぐぢゅ！　ぬぢゅ！

「ど、どまっへぇえええ、もうむりィ！　いげにゃい、イケにゃいがらぁあ、あぁああああ！」

絶頂したというのに、宝石玩具は止まることなくむしろもっと激しく肉壺を抉り弄ぶ。

「もうらべ、やべひぇぇ……」

「なぜだ？」

ズブ、ズヂュヂュッ！　動きを止めない梁型に弄れるアヌスへ、骨の指が一本追加される。梁型だけでも一杯の尻壺へ魔王の太い骨がズブズブ挿入されていく。
「っぉ、おぉぉおおぉおお、ぉおぁああ♥」
ガクガクと勇者の体が跳ね上がり汗が飛び散る。見開いた目からはポロポロと真珠とトパーズの粒が零れ落ちた。
「やめ、やべりぇでぇえええ！！」
「なぜだ？　言わねばもう一本増やすぞ」
「こわれひゃうぅううう！　ぎぼひゆしゅぎでごわれひゃうぅううう！　あひ、ひィいい！　イク！　イク！　イクぅううう!!」
ルビーとサファイヤを流し、叫ぶ勇者。酷く怯えながらプシャ――！　と尿道から潮を吹いた。
「こ……こんな永遠に、気持ちいいことしてたら……俺の頭も心もドロドロ溶けてダメになる……」
「それはいけないことなのか？」
「え」

「御前は気持ちいい思いをするのは禁止だと教えられ、生きてきたのか？」
「……そんなことはない、そんなこと禁止されたことはない……」
「ならばいいではないか」
魔王が指引き抜き、その指を鳴らす。すると、宝石の椅子がまた飴細工のよう溶けて形を変えていく。椅子だけではない、魔王の玉座しかなかった空間が歪み捏ね回され、広い部屋一面に赤いベッドが敷き詰められ、真紅のシーツがかけられた空間へと変貌した。
「心身を蕩かすほどの快楽を享受しても、誰も御前を咎める権利はない。そして御前は、快楽を貪り喰う自由がある」
勇者を組み敷き、魔王は口を重ね合わせる。硬く閉じられた唇を舌さきで、優しく突きながら侵入。ゆっくりと歯茎を舐めて舌同士を絡め愛撫する。
「ん、ふぁ……ンはぁ……」
魔王の舌使いに勇者の頬が蒸気し、うっとりと顔が惚ける。その間にも骨の手が繊細に勇者の肌を撫で回し、あらゆる性感帯を刺激し勇者の思考をドロドロにしていった。先ほどまで味わった暴力的な快感とは違う、さざ波のような小さく穏やかな快楽が勇者の心身を満たしていく。

「きもちいい……頭も体も、すごくどろどろしてる……もっとほしい……」
「ならばくれてやろう」
魔王は自らの肉棒を取り出し、勇者の足を広げ開閉を繰り返す菊華へ亀頭を擦りつけた。
「挿れるぞ」
ズブ、グチュゥウウヌヂュゥウウウ！！！
一気に挿入された熱塊に腸がグルグル鳴きながら体液を吐き出す。圧迫感に排泄衝動が沸きあがるも、腸壁は魔王の肉棒を一切放さず絡みついて締め上げる。
「――――っほぉおお」
お腹いっぱい呑みこんだ巨根に勇者は瞳をトロンと蕩けさせ桃色真珠を零す。
「動くぞ」
「んっ、ふぁ……！　っぁああ、いい、気持ちいい……気持ちいいよぉ……！」
紅いシーツを力一杯握る勇者の手に、魔王の骨の手が重ねられる。
グチュヌチュと結合箇所からはひっきりなしに、卑猥な音が鳴り響き勇者の喘ぎ声と一緒に輪唱した。
「そうだ、素直になれ勇者」

「あ、ぁあああ！　きもちいいっ！　とってもいいぃ！　魔王のきもちいいいい！　イク、いっちゃう！　イクのとまんないぃ！」

すっかり肉欲に夢中で自分から腰を振るう勇者を眺め、魔王の骨だけの喉が震え口角が耳元まで吊り上がる。

「堕ちたな」

パン！　パン！　パン!!

魔王のピストン感覚が段々と狭くなり、勇者の直腸内では牡槍が体積を増していく。魔王の呼吸も浅く速くなり、興奮のまま勇者の首筋へ歯を立てた。

「これで御前は我のモノだ。奈落の底よりも深く堕落するがいい！」

「いく、あぁっ、いくぅううううう!!」

怒張の槍が最奥まで捻じ込まれる。肉棒全体が震え、尿道からは白濁液が迸り、勇者の体内に熱い牡汁を叩きつけ穢していく。

どぶどぶ……。結合部分からは泡立った精液が漏れだし紅いシーツへ白い染みを広げていく。

「ぉ、あ♥　あひ、い、ぃいいいいく！　イク、イクゥゥウウウウ!!」

勇者の夜色の双眸がアへり、呆けた口元からは涎が止まらない。ガクガクと痙攣する手足を魔王の背中へ回し、絶頂へ登りつめる。

ドッビュ、ドッビュッビュ！

花芯からは噴水みたく潮吹きが止まらず魔王と自分の体を汚していく。

「と、とっまんにゃいいいいい！　いく、いくのとまんにゃいいいいい！　れもいいのぉおおずっとイク、ずっとこのままきもちぃいい、ことしへりゅのぉ！　イク、イクゥウウウゥウウ!!」

夜空の双眸から無数のピンク色の宝石が零れつづけた。部屋が桃色の宝石で埋まるまで、そう時間はかからない。

・・・・・・・

白い部屋一面に赤いベッドが敷き詰められた空間に、艶やかな悲鳴が響き渡る。

「あ、ぁあああ！　い、いいのぉおお、魔王様のきもち……きもちいいのぉおお！」

かつての勇者は魔王に飼われていた。

全裸に無数の紅い点々が咲き乱れ、首にはピンクパールで彩られた首輪。両手には宝石を溶かして作られた枷と鎖が嵌められている。

紅いベッドシーツの上には、ある分全てを売れば一生遊んで暮らしても余るほどの宝石が散らばっていた。

「イクゥ、イグゥウウ！」

ベッドのスプリングが軋むたびに勇者は軽く果てて、四肢を引き攣らせる。それでも魔王のピストン運動は止まず尻壺を牡槍で何度も穿つ。

「倒すべき敵の玩具になるのがそんなにいいか」

「いい、いぃれひゅ！　魔王様のオモチャになれて幸せれひゅ！」

「そうか、ならこれでもか」

転がる無数の宝石を魔王が手に取る。石は溶けて絡まり合い、卑猥で美しいディドルへと変貌した。そのまま雄々しい肉塊一杯の肉壺へ、魔王は梁型を近づけズブズブ埋め込んでいく。

グチュ、ミチミチ……グヂュヌヂュ！　ヌブゥウウジュ！

「ぉ、お、おぉおおぉほぉおおおおおおお!!」

愛玩勇者は白目を剥き、ぽっかり開いた口からは気泡が垂れる。苦し気に呻きながらも目から零れる雫は桃色宝石のみ。

「い、いいのぉ、いいの、魔王様ぁ♥　こ、これ気持ちいい、気持ちよすぎりゅ！」

「節操なしめ」

笑いながら魔王は腰を揺すりながら、同時にディドルも動かしていく。

「魔王様ぁ、いく、いっちゃうぅうう！　きもちよしゅぎていっひゃうううううう!!」

桃色の涙を流しながら、かつて勇者と言われた愛玩はどこまでも官能の谷へ堕ちていった。

苗床寵姫

森の中を馬が走る。馬の背には、鎧に身を包んだ少年騎士ラトモが跨っている。
仕事で隣国へ手紙を送り届けた帰り、思った以上に時間がかかっていた。まだ日は高いが、自国と今の距離を考えるとあまりのんびりしている余裕はない。
「遅くなっちゃった。せめて日が沈む前に、森を抜けないと……！」
なんせ森は魔物の縄張り。騎士とは言え、人一人で踏み込んでいい場所ではない。
「っつわ！」
いきなり木の上からスライムが飛び降りてきた。咄嗟の出来事にどうすることもできず、ラトモは落馬してしまう。馬は主人が落ちたことを知らず走り去ってしまう。
「ぬわっ、離れろ！」
ラトモは手で掴もうとするが液体なので手応えはなく、意味がない。暴れる少年騎士をほっといてスライムが鎧の隙間から侵入していく。
「ひゃん！　冷たい」

冷たさに気を回している間、スライムはラトモの肌に纏わりつき下へ下へと進んでいく。そのまま臀部の割れ目に入り込み、不浄の孔に滑りこむ。液体であるスライムは僅かな穴の間から容易く直腸の中へ入り込んだ。

「ひっ！　やめろ！　出てけ！」

どうすればいいのかわからず、少年は尻を力むがスライムはどんどん中に入っていく。冷たいスライムが腹に入り込み、どっしりと下腹部が重くなる。

「あぅ、んっ、お腹いたいぃ」

ギュル、ギュルルル！

唸る下腹部。腹痛と圧迫感に膝をついてしまう。ポタポタと鎧の中で珠の汗が浮かび、ムッと鎧のなかが蒸れていく。

一方、直腸へ入りきったスライムは腸を歩きだす。振動しながら結腸を通り越え、大腸を揺さぶりながら蠢き通ると、小腸付近で滑るように転がり落てくる。

ギュルギュルルル！　グルグルルル！

「んぐぅうぅぎぃいいいい!!」

脂汗を流しながらラトモは、鎧に覆われた腹を押さえるしかできなかった。スライムか

ら与えられる感覚は、猛烈な痛みを感じながらひり出す下痢の感覚に近い。降りてくるに従い開放感と爽快感が高まっていき期待で菊皺を拡げてしまう。しかし直腸の出口一歩の所で再び結腸を目指し、腹を揺らしながら歩いていく。

「はぁ、あぁ……はぁ……！　ぉ、おおおお?!　ごぉあああっ！　ぎぃいい!!」

痛みに呻き、頭を地面に擦りつける少年騎士。尻穴を力ませてスライムを押し出そうとするが、溜まったガスが出てくるだけだ。

ぶぴ！　ぶぴゅ！　ぶぴぶぴっ！

「う、ううぅ」

森の中で騎士が膝をつき屁をこす姿はおかしい。それでも羞恥心に染まりなが腹痛の原因を取り除きたい一心で少年騎士は括約筋を力ませた。

「はぁ、ああ……ふぅぅ……お、お尻が、へん、変だっあ、ああっ……」

スライムの往復運動にすっかり腸内はドロドロに蕩け、ガスも出し切った菊華からはポタポタと腸汁が垂れていた。ラトモも、腹痛よりも排泄器官でどろりとした熱い快感を覚えていることに戸惑い、ただスライムになされるがままだ。

ドチュン！　ドチュン！　ドチュン!!

「あひぃ！　ひぃ！　にゃんにゃの？！」
いきなりスライムが結腸を叩き始めた。グルグルと回転しながら直腸に留まり何度も、通過したS字結腸を小突きだす。便意の代わりに、質量と骨が砕けるような快感が体に走る。
ドチュン、グチュン！　ブヂュン！　ブヂュン！
「しょ、しょこ、しょこりぇめえええええええ！！！　ふひィいいい！」
ある場所に回転されながら擦られると股間に血流が集まりだした。スライムも何かを感じ取ったのか、執拗にソコも小突きだす。その度に陸に上がった魚のように体が跳ねるラトモ。
「おふぅ！　ふぅううう！　りゃめおかひくなゆ、おかひくなっひゃうううう！」
ガクガクゥウウウ！　勝手に腰が前後に動いてしまう。股間の熱は膨れ上がり、鎧の中で立派な逸物を勃起させていた。
「ほぉあ？　お、おひりィい?!　おひりおかしいいィい、オナラと変な汁が止まらないィイィィイやあああ！」
ぶぢゅ、ぶちゅぶぢゅぅうう。ぬちゅぶっぴゅ！　スライムで緩んだ排泄孔から腸汁を

勢いよく飛ばして鎧を内側から汚してしまう。ぶちゅぶちゅと直腸汁を噴くたびに、快便を増幅させた快感が直腸から肛門まで吹き抜けていく。

ドジュン！　グヂュン！　ブヂュン！　ブクク……ドッビュゥウゥウゥウウウ!!

結腸を突く先端が、大きく膨らみ弾けた。結腸を物凄い水圧で何かが通り抜けて、大腸に重くどっしりしたナニかが植え付けられる。

「おっ、ほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお?!」

体内放圧の凄さにラトモは、地べたに両手をつき両脚をピーンと立たせながら喉を反り返して叫ぶしかできなかった。

・・・・・・・

森の中、スライムに捕獲された場所から一歩も動かずに鎧姿のラトモが四つん這い姿でいた。

びゅる！　ぶりゅぶっびゅるるるるる！　鎧の内側、排泄孔から水色の塊がひりでてくる。どうやらスライムに植えつけられたのは子種だったらしい。

箱の苗床

とあるダンジョンの最奥、宝物が溢れるそこに一つの宝箱がある。一見すると大きいだけの普通の箱だが、中身は冒険者達が恐れる人食いミミックが潜んでいる箱だった。そして青年が捕まり閉じ込められている。

光が一切差さない狭い箱の中、四つん這いの体勢で手足を甲殻類特有のハサミに押さえつけられ、背中にはハサミの主がのしかかっており、重さに身動きも満足にとれない。

「ひっん！　やぁな、なにしてんだよぉ！」

不思議なことに、青年は喰われることなく箱の中に引き摺り込まれ、ミミックにズボンをちぎられ、生殖器らしきモノを体内に打ち込まれた。

ズブ！　ジュブ、ヌプ！

「くっ、ふぅご、のぉ！」

見えない存在に自分の秘孔を貫かれている証拠にヌプヌプと粘着質な音が狭い箱に中で

反響し、青年の腸壁には甘い衝撃が何度も駆け巡っている。肛門が濡れ、尻穴から零れる汁が太腿をつたう感触も知覚できた。
わずかに動かせる頭を動かすと、背中に大きな目玉が自分を見下しており青年は睨みあげた。
ガチガチガチ。蜂のような大顎でもあるのか、ミミックが音を鳴らす。それでも青年は怯むことなく姿がはっきり見えないミミックを睨む。
ズブゥウウグヂュウウ!!
「ほごぉおおお?!」
質量の増した熱塊に青年は濁声を上げてしまう。
緩やかに直腸を穿っていた生殖器が荒っぽくブチこまれたのだ。人間同士の性交なら根元まで埋まった状態だろうか、青年の腹がわずかに膨らんでいる。
ドジュン！　グヂュ！　ブヂュン！
荒々しいピストンがひたすらつづく。長大なミミックの生殖器が疑似排泄のよう引き摺りだされた次には、一気にS字結腸すら通り過ぎて下行結腸にまで到達し、直腸から大腸までをペニス詰めされた。

「ほごぉふぐぅひぐぅうう！　ふぎィいいいい！」

普通なら一生体験しない腸責めに青年はひたすら叫ぶしかなかった。人間のペニスと違い柔軟性のあるミミックの生殖器は腸の形にぴったり添いながら青年の腸に合わせるように奥へと進んでいく。

ガチガチガチガチ！　ピストンを繰り返しながら顎を鳴らす音も大きくなり、青年の尻壺へ生殖器が打ち込まれるたび、表面の歪な凹凸で膨張していく。

「もうぶりィぎィひいい！　ぉほ、おおお！」

ドジュン、ドヂュゥウウブヂュゥ！

大腸まで伸びていたミミックのペニスがさらに、伸びて横行結腸から上行結腸にまで遡りペニスの先端が小腸の出口へわずかに顔をだした。

「ぉ、あああ？　いや、やっ、らにィいいいい!?　あああ?!　ふくれ、腹が膨れてぇ?!」

ボコ、ボココボコボココ！　青年の小腸へ小さくブヨブヨとしたモノが入り込んでくる。見えない分、内部の感覚を細かに感じてしまう。

「ま、まさか卵ぉほごぉおお?!」

殺してから食べるはずのミミックが自分を引き摺り込んだ理由は、生きたまま子供の餌

にするためなのか？　最悪な予想に体の熱が下がっていく。
「らだ！　いやだぁ!!」
そんな青年を気にすることもなく、ミミックは卵を次々青年に産み付けていった。

・・・・・・・

ミミックに引き摺り込まれどれだけの時間が経ったのか――
ズチュ！　ヌピュン！　ズチュズチュ!!
「ぐちゅぐちゅするにゃぁ！　あひぃんっ、もうりゃぁ！」
卵を産みつけられてからもひたすら、アヌスを掻き回されていた。真っ暗な箱の中では青年はギラギラ光る目玉に見下されながら、ボテ腹を揺らしアヌスに感じる熱い衝撃に翻弄されている。
グヂュヌヂュ！　ズブズブ！　ブヂュブブシュ！
「ぉ、ほへぇ、あふぅ、ふへぇあっああ！」
あまり大きくないミミックの生殖器は蛇が這うように上行結腸に到達し、小腸付近に産

みつけた卵を小突き、腸を揺さぶりながら何度も挿入を繰り返えす。
視力が効かない分、嫌でも感覚が研ぎ澄まされる。ミミックの生殖器と擦れる腸肉が摩擦されると腰が跳ねてしまうし、前立腺のあたりを刺激されると陰茎に熱が籠り硬くなってしまう。
「ひぎぃ、もうこぢゅくにゃ……ふひィ……はふ……」
箱の中、酸素不足と脱水症状で意識が朦朧とする青年。しかしミミックは捕獲した獲物の体調などおかまいなしに止まらない。相変わらず、ただひたすら生殖器を青年の菊座に穿ち卵を刺激する。
「……あー……あ……」
狭く何も無い箱の中、青年は段々意識が遠のいていく。
「あ……う……」
熱気に包まれながら青年はゆっくりと眠っていた。
ズブ、グヂュウウヌブゥゥウウウ。
「……」
ジュブズブゥヌブッ！　グップブヂュ！　ズブジュブヌブ！

掲載一覧

宝石遊戯　※pixiv「寵愛1」（寵愛―魔の花嫁へ堕ちる者）
勇者母胎　※pixiv「寵愛7」（寵愛―魔の花嫁へ堕ちる者）
椅子と結婚した王様　※pixiv「寵愛10.　二話目」（寵愛―魔の花嫁へ堕ちる者）
愛辱ウェディング　※pixiv「寵愛18.　五話目」（寵愛―魔の花嫁へ堕ちる者）
苗床寵姫　※pixiv「寵愛5　一話目」（寵愛Ⅱ　苗床寵姫）
箱の苗床　※pixiv「寵愛5　二話目」（寵愛Ⅱ　苗床寵姫）
牝嫁騎士　※pixiv「寵愛17.　一話目」（寵愛Ⅱ　苗床寵姫）
淫堕隷属竜騎士寵姫　※pixiv「寵愛18.　一話目」（寵愛Ⅱ　苗床寵姫）

寵愛Ⅰ・Ⅱ再録本

2020年　12月14日　発行日
2021年　　4月20日　　DL

【著者・編集】　カルビ
【　制　作　】　焼肉文庫
【　発行元　】　buekbe2@gmail.com(Mail)
かるび@ACND64RH63(Twitter)
カルビ・12050686(pixiv)
【印刷・製本】　コミックモール

◆注意◆

本書は成人向けです。18歳未満の方の目に触れないよう、お願いいたします。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載は禁止です。